

## アーザードのアブル・ファズル伝について(四)

近藤 治

### 頭陀袋(雑記帳)

托鉢僧が持っている托鉢用の皿は乞食皿(gadā'i)と呼ばれ、誰もが見たことのあるものである。そのなかに僅かばかり入っているものはいえ、炊き込みご飯、あるいはヒヨコマメの粒、食パン用の小麦粉、豆と炊き込む各種の肉片、食用油に浸して乾燥させたもの、さらに味の無いものや食べ残し、新鮮なもの、甘いもの、塩辛いもの、野菜、果物等々、要するにあらゆるものが少しずつそのなかに入っている。各種の書物を経巡っている趣味人や探求者たちは、1冊の質素な書物を手元に置いているものである。この種の書物はどんな分野の学問であれ、どんな分野の芸術であれ、散文または韻文でもって書かれている。人々はこれを頭陀袋(kashkūl)と呼んでいる。一般的にいえば、ウラマーたちの頭陀袋が有名である。熱心な探求者たちは、こうした頭陀袋から知識の源泉を手に入れる。デリーで私はアブル・ファズルの頭陀袋であった1冊の手写本を見たことがあった。それはシャイフ・アブル・ハイル(Shaikh Abu'l Khair)<sup>(1)</sup>の手によって書き写されたものであった。

総合辞典(*Jāmi' al-Lughāt*)は簡便な辞典の一種である。学者が探索中に語彙を集録したものであろう。世人はこの書をアブル・ファズルのような権威者の作に帰して恥をかいている。

ラズム・ナーマ(*Razm-nāma* 合戦物語の意)[マハーバーラタの翻訳]には、彼の2種の講話(khuṭba)が収められている。

アブル・ファズルの著作類を見ると、恋愛や花柳にかかわるテーマが作品群のなかで極端に少ない、ということが分かる。青春ものや花鳥あるいは審美に関する詩句をたまさかに特別の訳あって詠まざるをえないよ

うなときには、余儀なくしてそのようにしていた。彼の気質の根本のところにある中核物は、理性(nafs-e nāṭīqa)に基づく考え方(506)であり、学識(hikmat)であり、洞察力(ma'rifat)であり、哲学(falsafa)であり、〔父から受けた〕助言・訓戒であり、現世の虚妄性(be-ḥaqīqatī)であり、世人の欲望に対する軽蔑であった。上に紹介してきたアブル・ファズルの著述から、次のこともまた明らかである。すなわち、彼の書き残したものは彼が筆のおもむくままに書いたものであり、また心中に生起したことを述べたものである、ということである。彼は自分の著述に要する労苦や勤勉のために精力を注ぎ尽くすわけにはいかなかった。彼は2つの天賦の美質に恵まれていた。一つ目は主題の尽きることなき横溢であり、二つ目は言語による表現力の卓越である。なぜなら、もしこれら2つの美質が欠けていたならば、作品中においてあのような明哲さ(ṣafā'ī)と流暢さ(rawānī)はありえなかったであろうからである。

## 韻文

韻文の書は書かれていない。とはいっても、アブル・ファズルが生来作詩の気質に欠けるところがあったと解すべきではない。彼がどこに詩を書いていたか、また彼が僅かとはいえどの程度の分量の詩を書いていたか、ということについて私は慎重に調べてみたことがある。彼が要務<sup>とりこ</sup>の虜となり時間に抱束されたのは仕方のないことであるが、不必要な仕事にかかわることは彼の内なる規範に合致しなかった。彼が適切かつ相応と判断した箇所では、散文の広場を韻文の花束で飾っている。それによって彼が皇帝の御前に参上し、今まさに補佐している気分となっていることが伝わってくる。テーマとして取り上げたいと思ったことは、極度に洗練された適切な表現並びに澁刺とした複合語を用いて、彼は韻文にまとめ上げていた。これは必要不可欠なことであった。それに、こうした洗練さと適切さは兄ファイジーのペンによっては得られないものでもあった。アブル・ファズルはしばしばマスナウィー (maṣnawī)の詩形で詩を書いている<sup>(2)</sup>。そして

ニザーミー (Nizāmī Ganjawī 12世紀－13世紀初のペルシア詩人)の『神秘の宝庫』(*Makhzan-i Asrār*)と『アレキサンドロスの書』(*Sikandar-nāma*)に照応させている。アブル・ファズルは頌詩の詠み方にかけては絢爛さでもって傑出し、第一人者の位置を占めている。

## 風貌と性格

『アクバル・ナーマ』の結語において、アブル・ファズルは神から授かったいくつかの賜物について述べている。そのうちの5番目と6番目の賜物によって、次のようなことが分かる<sup>(3)</sup>。すなわち、彼は中肉中背であり、四肢は均整がよくとれており、常日ごろ健康状態であった。しかし色は浅黒かった。読者諸賢はアブル・ファズルが嘆願書の末尾のどこかで、ハーニ・ハーナーンについて苦情を述べ、そのなかで次のように述べていることをご存知であろう。すなわち、「陛下様、人は色白になればなるほど、その分心が黒くなるものです。私は色黒ではありますが、心は黒くありません」と<sup>(4)</sup>。炯眼の士はアブル・ファズルの著作類をしばしば読まれたことであろう。そして彼は意思堅固にして寡黙勝ちの忍耐強い人物のようだ、との思いを強く抱かれたことであろう。彼の面貌はどんな時に描かれたものでも何か思索している様子であり、どんな活動をしている時でも、またどんな物事にかかわっている時でも、立ち居振舞いに泰然としたところがあることを明示しているように思われる。こうしたことは当時の各種の歴史書の様々な記述箇所から漏れ出ている。

『マアーシルル・ウマラー』(貴顕録)によると<sup>(5)</sup>、下品な言葉はアブル・ファズルの口からついぞ出ることはなかった。罵詈雑言によって言葉を汚すことはなかった。他人に対しては、自分の使用人に対してさえ怒ることはなかった。欠勤中の俸給が彼の管轄下(507)において差し引かれることはなかった。彼が使用人として雇った者は、二度と解雇することはなかった。無能な役立たず者がおれば、その業務を先ず取り替えてやり、できる限り使用人として雇い続けた。アブル・ファズルはよく口にしたものだ、

「もし使用人が解雇されて出ていけば、誰も役立たずと思い込んで使用人になる者がいなくなる」と。

太陽が白羊宮に入り新年が始まると、アブル・ファズルは自分の家とすべての工房(kārkhāna)<sup>(6)</sup>を見て回り、写本の値段を定め、貸借対照(goshwāra)の表を作らせて事務所で受け取り、〔不要になった〕帳簿を燃やしてしまった。〔着古した〕衣類はすべて使用人たちに分け与えた。しかしズボンは目の前で燃やしてしまった〔そうすることによどのような都合が込められていたのかは分からない〕。

アブル・ファズルには3人の妻があった。(1)一人はヒンドゥスターン人の妻である。おそらくこの妻が正妻(ghar-wāli)であったのであろう。アブル・ファズルの両親は、彼女と結婚させた息子の家に住みついていたのだろう。(2) 2人目はカシュミール人の妻である。パンジャーブとカシュミールへの旅行中、気晴らしの荷持と一緒に届けられたとしても不思議なことではない。こうしたことは、意思堅固な学者にして公正な考えをもったかの人物には起こりそうもないことであるが、しかし人間であればある時には心浮き立つこともあるものである。(3) 3人目はイラン人の妻である。私の考えに間違いがなければ、この妻はただペルシア語の正確さと重要な慣用句の流暢さを期す意図をもって迎え入れたもののようである。ペルシア語による著述はアブル・ファズルの仕事であった。彼は言葉の探求者だった。何千という慣用句は、その慣用句にとってふさわしい場所においてこそ、それぞれの役割を果たすものである。とはいうものの思いもよらぬところから質問があったり、教えが届いてきたりすることがありうる。表現の形式にうるさい人士が書面に文句をつけてくるし、また言語学者が特定の箇所<sup>あしかせ</sup>に足枷をかけてことがある。その上にまた家事の些細な事柄や家業の瑣末な事柄に関する表現を、辞書や用語集によっていつ修得できるというのであろうか。ファイジーとアブル・ファズルの二兄弟の会話の際には、いつもイラン人が同席していたということ、そしてまた彼らのすべての従者と技能職人はイラン人であったということは、文献によっても明証されることである。しかしながら家庭内の種種<sup>くさくさ</sup>の事柄は、家のなかでこそ行われるものである。自然な形の慣用句は、この家庭内方式によら

なければ獲得できないものなのだ。

### 配膳用敷布<sup>(7)</sup>

アブル・ファズルの食事の様子を知ると驚き入ってしまう。〔使用される〕穀類の目方は22セルであった<sup>(8)</sup>。これがさまざまな品々に料理されて配膳用敷布の上に並べられた。息子のアブドゥルラフマーンがそば近くに座り、執事(khān-sāmān)のように見守っているのが常であった。執事は執事で前方に謹座していた。息子と執事との2人は、アブル・ファズルがどの品を盛った皿から2度、3度あるいは数口分の料理を口に入れたかに気を配っていた。ただ一度だけ口に入れ残りには手をつけなかった料理は、次の時から配膳用敷布の上に出されることはなかった。いずれかの料理に味付け上の齟齬があると、アブル・ファズルは試食して見よと〔息子に〕合図するだけであった。息子の方は少し味見してから、執事の方に伝えた。しかし口から言葉に出して伝えた訳ではなかった<sup>(9)</sup>。執事はその料理の改善を行った。デカン遠征中の配膳用敷布は広く、食事は非常に丁寧に用意された上等の品であったので、現在の人々には信じられないかもしれないが、1脚の大きな天幕(khaima)のなかに配膳用敷布が広げられていて、そこに千枚に上る見事な食事用大皿が必須の備品とともに並べられていた。そしてあらゆる貴顕たちに振舞われていた。この天幕のすぐ近くには一段と大きな(508)天幕が設けられおり、そこに地位の低い人々が集まって食事をしていた。厨房は常時活気に満ちていた。いくつかの豆粥(kichrī 病人・子供用)の大鍋が火にかけられていて、空腹で来た者には自由に振舞われた。

26回目の感謝祭(shukrāna)が行われていたとき、すなわちヒジュラ歴979年シャアバーン月12日月曜日(1571年12月30日)の夜<sup>(10)</sup>、アブル・ファズルに男児が生誕した。祖父ムバーラクは内孫にアブドゥルラフマーン(‘Abd al-Rahmān)と名付け、自ら教育を授けていた。アブドゥルラフマーンはインド生まれであるが、ギリシア人(Yūnānī)のような気質を持って

いた。アクバルは彼を自分の2人の乳兄弟(koka)一属に加えた。すなわち、アクバルは彼をサアーダト・ヤール・ハーン・コーカ(Sa'adat Yār Khān Koka)の娘と結婚させた。

47回目<sup>(11)</sup>の感謝祭が行われていたヒジュラ暦999年ズール・カアダ月の3日金曜日(1591年8月13日)に、アブドゥルラフマーンのところに男児が生まれた。皇帝はこの子にビシュータン(Bishūtan)<sup>(12)</sup>と名付けた。

## おわりに

4回にわたって本誌に連載してきたアーザードのアブル・ファズル論の完訳は、以上の通りである。アーザードが原文に付していた小見出し類をここで一括してまとめてみると、次の如くである。これによって彼のアブル・ファズル論の全体構成とおおよその内容を推察することができるであろう。

アブル・ファズル生誕

初期の事蹟

アブル・ファズル、アクバル宮廷へ出仕

皇帝のアフマドナガル開城作戦

アーシール城塞征圧

アブル・ファズル謀殺(これは訳者の追加)

アブル・ファズルの宗教論

アブル・ファズルの文体

『アクバル・ナーマ』

『アクバル会典』

『アクバル・ナーマ』『アクバル会典』の批判について

『アッラーミー書簡集』(『アブル・ファズル名文集』)

『イヤーリ・ダーニシュ』

『ルクアーティ・アブル・ファズル』

頭陀袋(雑記帳)

韻文

風貌と性格

配膳用敷布

これらの小見出しの下での叙述は、長短の差が著しい。全体を通観してみると、生誕からアーシル城塞征圧までのところは、アブル・ファズルが長ずるに応じて活動を広げていった、その活動の事蹟を述べたものである。次いで彼の宗教論と、数多い著作に見られる文体とに関する統括的な検討を行っている。これに続けて『アクバル・ナーマ』以下韻文に至るまで、アブル・ファズルの作品論が展開される。ただし「頭陀袋」の項のみは、そういう名称の作品がアブル・ファズルにあったのではなく、備忘用に彼が作っていたいわば雑記帳の写しが存在していたことを指摘しているのである。最後に配された2つの小見出しのもとで、アーザードはアブル・ファズルの肉体的、性格的特徴を実に具体的に述べるとともに、食事についてうるさかったアブル・ファズルがそうした食事や庶民用豆粥などを、貴賤を問わず多くの人々に振舞っていたことを明らかにしている。

次に、アーザードがこのアブル・ファズル論を草するに際して参照した文献について述べておきたい。これについてはこれまでに発表してきた3回の拙論の各処においてその都度指摘したことではあるが、ここでは再度まとめて触れておくことにする。まず最初に挙げられるのは『アクバル・ナーマ』や『アクバル会典』など、アブル・ファズル自身が書き残した諸作品であって、アーザードがこれらを綿密に活用したことはいうまでもなく当然のことである。次に、アブル・ファズルとほぼ同時代の歴史家で彼に激しい対抗心を抱いていたバダーウニーの『ムンタハブル・タワーリーフ』(『諸史選粹』)を取り上げ、これを利用しつつ批判してアブル・ファズルを擁護している。第3に、ムハンマド・カーシム・フィリシュタの歴史書や、ジャハーンギールの回顧録『トゥーズキ・ジャハーンギーリー』および彼の治世時代の歴史書『イクバル・ナーマ』など関連性の高い歴史書を援用しているのは、これまた当然のことである。

第4に、アブル・ファズルの世界認識や地理的理解に関連して論ずる際には、アミン・アフマドラジーの『七気候帯論』やオランダ東インド

会社重役デ・レートの記録を取り上げながら、アブル・ファズルの知見の新しさを指摘している。第5に、アブル・ファズルが『アクバル会典』の末尾に付した自叙のなかで明らかにしている自伝的記述はいうに及ばず、シャイフ・ファリード・バッカリーの『ザヒーラトゥル・ハワーニーン』（『大官淵叢』）やシャー・ナワーズ・ハーンの『マアーシルル・ウマラー』（『貴顕録』）など、ムガル朝時代に成った著名人の事蹟録も適宜利用している。アブル・ファズルの人物論を試みる際には、当然援用すべき文献であろう。その結果、アーザードが書き上げたアブル・ファズル論は、先行する2つの事蹟録中のアブル・ファズルに関する記述内容を質量両面においてはるかに凌駕するものとなっている。

ムガル朝の伝統がなお根強く息づいていたデリーに生まれ、そこでアラビア語やペルシア語などの伝統的学芸を修めながら、詩作にも秀でた文人として成長したアーザードが著した『アクバル宮廷』は、彼にしてはじめて可能な豊かな内容を取めた大著であり、アクバル時代の著名人たちについて論じた人物論書としては出色の作品である。この書のなかに収められた彼のアブル・ファズル論は、近代のインド人自身が物した最初の本格的な論究であり、分離独立までに至る彼以後の時代を含めて通観してみてもアブル・ファズル論の白眉であるということができよう。

そのためであろう、『アクバル・ナーマ』の英訳者として有名なイギリス人学者ヘンリー・ベヴァリッジ(Henry Beveridge)<sup>(13)</sup>が、近代インド人の果たしたアクバル時代史研究としてはほとんど唯一の参考文献として扱っているのは、アーザードのこの『アクバル宮廷』であった<sup>(14)</sup>。

アーザードのアブル・ファズル論は、何ものにもとらわれない、近代人としての自由な立場から叙述を行なっているところに最大の特徴がある。その叙述は、時に軽妙なシャレや皮肉を交えながら明晰、軽快な筆致でなされている。こうした点については、いずれ改めて論じて見たいと思っている。



注

- (1) アブル・ファズルとは9歳違いの2番目の弟。彼もアクバル宮廷に仕えていたようである。Cf. *Ā'in-i Akbarī*, English tr., by H. Blochmann, Vol. I, p. xxxiii.
- (2) マスナウィーは2つの半句がそれぞれ同一の韻を踏む形で進む長詩。アブル・ファズルの場合はこのマスナウィーの詩形で詠んだ短詩が多く、2半句1行詩も少なくない。
- (3) アブル・ファズルが神から授かった自らの賜物について述べているのは、『アクバル・ナーマ』ではなく『アクバル会典』の結語においてである。彼はそこで自分が神から授かった賜物について32項目列挙しているが、その5番目および6番目として挙げているのは次のような項目である。「第5に、四肢の健全さ、並びに体力の正常さと均衡。第6に、これら二人の尊敬する御方(アブル・ファズルの両親)に長く勤仕したこと。この長い勤仕は、まるで内なる災難と外なる災難に対する城塞であり、精神上および物質上の事故からの避難所であった」(*Ā'in-i Akbarī*, text, II, p. 279)。
- (4) 出典はまだ確認できていない。
- (5) Shāh Nawāz Khān, *Ma'āṣir al-Umarā'*, ed. by 'Abd al-Raḥīm and Mīrzā Ashraf 'Alī, 3 vols., Calcutta, 1888, 1890, 1896, English tr., by H. Beveridge and B. Prashad, 3 vols., Calcutta, 1941, 1952, 1964. アブル・ファズルに関する記述は、text, Vol. II, pp. 608-622, English tr., Vol. I, pp. 117-128に収められている。
- (6) この場合の工房とは、主として写本の各工程を受け持つ作業場であったと思われる。
- (7) 原語ダスタルハーン(dastar-khwān)は食膳を並べるためのテーブルクロス。ただしインドや西アジアの伝統的な食事法では床に敷き、その囲りに胡座して食事を取るのではこのような訳語にした。
- (8) セール(ser)は重量単位で約900グラム。22セール(約20キログラム)は、ムガル朝政府から支給されるアーター(ātā)すなわち未精製の小麦粉(玄麦粉)を主にした穀類の重量をさしていると考えられる。近藤治「シャイフ・ファリード・バッカリーのアブル・ファズル伝について」『西南アジア研究』第70号、2009年、103ページ、注(32)参照。
- (9) インドの伝統的な習慣では、一家の主は家族に先がけて一人で食事した。また食事時の会話は禁忌された。
- (10) ヒジュラ暦979年シャアバーン月12日の満26年前即ちヒジュラ暦953年シャアバーン月12日(西暦1546年10月8日)に、以後毎年この日に感謝祭が行われるような重大な事柄があったとすれば、それは一体何であったのだろう

うか。因みにアクバルの生誕日はヒジュラ暦949年ラジャブ月5日(西暦1542年10月15日)であったので、上記の日はアクバルが太陽暦で満4歳に7日未満の日、太陰暦で満4歳と1ヶ月7日余の日であったことになる。このころアクバルの身上に起こった重大な出来事としては、当時のカーブル城主の叔父ミールザー・カームラーン(Mirzā Kāmran)のもとに託されていたアクバルが、カーブル城包囲中の父帝フマーユーンの軍勢を前にして城壁から晒し出され、あわやムガル軍の砲撃を受けかねぬという危機のあったことが想起される。この時、アクバルはムガル軍砲兵指揮官のとっさの機転で奇跡的に救われる。本文中に述べられている感謝祭というのは、この日の救命に対して毎歳神恩に感謝して挙行されるようになった謝恩の祭事をさしているものと思われる。当該事件の記述については、*Akbar-nāma*, text, Vol. I, pp. 265-266, English tr., Vol. I, pp. 511-513を参照。なお、西暦1571年12月30日は日曜日であるが、この日の月の出以後は太陰暦では既に次の日の月曜日に移っているので、このような表記となるのである。

- (11) 底本をはじめとしてどの版本も27回目(satā'iswān)となっているが、ここは47回目(saintāliswān)でないとおかしい。アラビア文字で表記したウルドゥー語の序数詞27と同じく序数詞47とは、一見したところ非常によく似通っているために、筆写の段階で筆耕が47を27と誤記したのであろう。
- (12) 底本はピシュータン(Pishūtan)としているが、使用頻度の高いピシュータンとしておいた。フィルドウシー『シャー・ナーマ』に登場する英雄イスファンディヤール(Isfandiyār)の弟の名である。
- (13) 彼については間野英二『バーブルとその時代』バーブル・ナーマの研究IV 研究篇、松香堂、2001年、22、145 & n.2, 486-487ページなど参照。同書付篇第4章「アンネット・スザンナ・ベヴァリッジ小伝」(482-498ページ)は表題の如く『バーブル・ナーマ』英訳者として著名なベヴァリッジ夫人(Annette Susannah Beveridge)の伝記を論じたものであるが、夫ヘンリー・ベヴァリッジについても我が国ではじめて詳しい紹介を行ったものである。
- (14) 例えば、本稿(二)注(27)で指摘しておいたように、ベヴァリッジは『アクバル・ナーマ』英語版第3巻868ページ脚注1において、自説を補強するものとしてアーザードの『アクバル宮廷』470ページの解釈を挙げており、また同書索引部42ページのシャイフ・ムバーラクの項では、『アクバル宮廷』328ページにおいてムバーラクが女奴隷腹の子ではなかったかとの疑いを挙げていた点を紹介している。